

令和 5 年度 日本臨床精神神経薬理学会海外研修員 完了報告書

千葉大学大学院医学研究院 精神医学教室

大迫 鑑頭

留学先:

Clinical Psychology Unit, Bellvitge University Hospital, Barcelona, Spain /
Psychoneurobiology of Eating and Addictive Behaviors Group, Neurosciences Programme,
Bellvitge Biomedical Research Institute (IDIBELL), Barcelona, Spain

留学期間：2023 年 6 月～2025 年 5 月

指導者：Fernando Fernández-Aranda

研究テーマ:

1. 行動依存症（ギャンブル・ゲーム・買い物等）に関する臨床像と精神病理の国際比較研究
2. 食行動異常および Food Addiction の神経心理学的・内分泌学的指標の解析
3. 日本とスペインにおける依存症医療体制・治療介入モデルの比較検討

はじめに：

私は令和 5 年度日本臨床精神神経薬理学会海外研修員として助成を受け、スペイン・バルセロナ大学の附属施設である Bellvitge University Hospital (Clinical Psychology Unit) および IDIBELL (Psychoneurobiology of Eating and Addictive Behaviors Group) において、約 2 年間の研究研修を行いました。これらの機関は摂食障害および行動嗜癖の臨床研究において欧州を代表する拠点であり、特に食行動異常、依存症スペクトラム研究、神経心理評価、内分泌系バイオマーカー研究など、多分野の研究者が連携する国際的環境が整っております。

指導教官である Fernando Fernández-Aranda 教授は、摂食障害・行動依存症研究の国際的リーダーであり、疾患の精神病理、生物学的基盤、治療反応性を多角的に解析する研究を多数主導してこられました。本研修では、行動嗜癖と食行動異常にみられる共通の精神

病理や、治療反応性を規定する臨床・生物学的要因に焦点をあて、複数の研究プロジェクトに参加いたしました。本報告では、その中核となる三つの研究テーマについて記述いたします。

研究内容：

1. 依存症スペクトラムにおける行動嗜癖と食行動異常の精神病理・臨床像の比較研究 (投稿中)

本研究では、ギャンブル障害・強迫的買い物・ゲーム嗜癖などの行動依存症と、過食症・過食性障害などの食行動異常の精神病理構造を比較し、「依存症スペクトラム」としての共通性・相違点を明らかにすることを目的としました。

行動嗜癖群と食行動異常群はいずれも衝動性、強迫性、情動不安定性、不安全感、対人不信などの心理特性を共有しており、また行動の反復と制御困難性という点でも類似した臨床像を示します。一方で、食行動異常群では身体像へのこだわり、自責感、羞恥心、情動調整の困難がより顕著であり、行動依存症群では報酬感受性、興奮性、外向的衝動性が比較的高いという特徴がみられました。

これらの所見から、行動依存症と摂食障害はいずれも依存症スペクトラムの中核に位置しつつも、動機づけ、情動制御、身体表象など、部分的に異なる病態力学が存在することが示唆されました。これらの知見は、非物質依存症を含む精神疾患の包括的理解に寄与するとともに、文化差の影響を受けにくい精神病理構造の抽出にもつながるものと考えております。

2. 摂食障害の治療反応性を規定する要因の解析

(COVID-19 発症例および代償的運動負荷の影響に関する研究群)

本セッションでは、留学期間中に実施した摂食障害治療転帰に関する一連の研究についてまとめます。これらは異なるテーマでありながら、「治療反応性を規定する臨床・心理的・行動的要因を解明する」という共通の目的を持っております。

(A) COVID-19 流行下で新規発症した摂食障害症例の治療転帰に関する研究 (引用論文 1)

COVID-19 のロックダウン期に初発した摂食障害症例が、従来型の発症例と比較してどのような臨床的特徴を示し、治療転帰がどのように異なるかを検討した研究に参画しました。ロックダウン期発症例では、孤立、生活リズムの乱れ、環境ストレス負荷により、急激に症状が顕在化して治療につながったと考えられました。精神病理や基本的な摂食障害症状は従来発症例と大きくは変わりませんでした。治療導入後の反応性は比較的良好で、治療成績も高い傾向がみられました。短期間で症状が悪化した急性増悪型であったことが、治療への動機づけを高めた可能性が考えられました。

この研究は、社会ストレスが摂食障害の発症機序に与える影響を示すとともに、公衆衛生上の危機的状況下における精神医療介入の重要性を示すものです。

(B) 代償的運動 (Compensatory Exercise) の高負荷が治療反応性に与える影響に関する研究 (引用論文 2)

摂食障害の一部症例では、過度の運動が体重調節や情動コントロールの手段として使用され、それが治療効果に重大な影響を及ぼすことがあります。本研究は、Bulimic spectrum disorders (BN および OSFED-BN) 478 名を対象とし、運動負荷レベルと治療転帰の関連を解析したものです。

高負荷の代償的運動を行う群では、病歴の長期化、衝動性・強迫性の高さ、ネガティブ情動の強さがみられ、結果として治療中断や非寛解のリスクが有意に高いことが示されました。また、BMI・体脂肪率などの身体組成も治療反応性の予測因子として寄与しており、特に代償的運動の高さは治療反応性に対して独立した負の予測因子であることが判明しました。

これらの結果は、精神治療介入において運動行動の詳細な評価が不可欠であること、過度の運動を適切に調整・再構築するプログラムの導入が予後改善につながる可能性を示しています。

3. 食行動異常と内分泌系バイオマーカーに関する研究 (投稿中)

本研究では、過食症や食行動異常に関連する内分泌指標 (例: グレリン、レプチン、インスリン抵抗性、ストレス反応系ホルモンなど) と衝動性・情動調整・摂食行動の関連性を探索しました。特に、治療導入前後における内分泌マーカーの変動パターンと症状軽快度の関係性を検討し、代謝・内分泌系の異常が治療反応性に影響する可能性を明らかにしつ

つあります。

これらの研究成果は現在投稿準備中であり、投稿中の論文では過食行動、代謝指標、治療反応性の関係を扱っております。薬理学会のテーマに関連する点として、内分泌系マーカーが治療反応性のバイオロジカル指標として機能する可能性や、代謝系と情動調整系の相互作用が摂食障害の病態を説明し得ることが示唆されております。

最後に：

今回の留学では、行動依存症から摂食障害に至るまで、依存症スペクトラムに共通する精神病理を軸に、臨床像、治療反応性、生物学的指標を多面的に検討する経験を得ることができました。多職種・多国籍研究者との共同作業を通して、研究デザイン、統計解析、臨床介入に関する知見を大きく広げることができました。今後は、今回得られた知見を国内臨床の改善に活かすとともに、国際共同研究を継続し、依存症スペクトラム研究をさらに深化させていく所存です。

引用論文：

1. Munguía L, Baenas I, Granero R, Ohsako N, Gaspar-Pérez A, Perales I, Rosinska M, Sánchez-Díaz I, Toro JJ, Sánchez-González J, Arcelus J, Paslakis G, Jiménez-Murcia S, Fernández-Aranda F. Eating disorder debut cases during COVID-19 lockdown in adults. Exploring differences in treatment outcome contrasting with pre-pandemic onset cases. Eur Eat Disord Rev. 2025 Mar;33(2):304-317.
2. Camacho-Barcia L, Sánchez I, Ibáñez-Caparrós A, Ohsako N, Granero R, Artero C, Crespo JM, Paslakis G, Jiménez-Murcia S, Fernández-Aranda F. The Impact of High Levels of Compensatory Exercise on Treatment Outcomes in Threshold and Subthreshold Bulimia Nervosa. Nutrients. 2024; 16(14):2337.

滞在中の日本での業績：

3. Ohsako N, Kimura H. Effective use of yokukansan for Caucasian patient with panic disorder: A case report. PCN Rep. 2024 Jul 29;3(3):e231.
4. 大迫 鑑顕, 木村 大, Fernandez-Aranda Fernando. 【社会の中の摂食障害】疫学データ

から見た摂食障害 COVID-19 パンデミックが摂食障害に与えた影響とその対策. 日本摂食障害学会雑誌, 4(1), 45-54.

5. 大迫 鑑頭, 中里 道子. 摂食症 神経性過食症・過食性障害の診断と治療課題. 児童期・青年期のメンタルヘルスと心理社会的治療・支援 精神療法 (増刊 11) 231-240 2024 年 6 月.
6. 金原 信久, 仲田 祐介, 伊豫 雅臣, 大迫 鑑頭, 鈴木 均, 木村 大, 渡部 芳徳, 比留間 真由美, 井手本 啓太, 田村 真樹, 太田 貴代光, 吉田 泰介, 山中 浩嗣, 青木 勉, 斎賀 孝久, 野々村 司, 横山 大輔. ドパミン過感受性精神病(DSP)を含む治療抵抗性統合失調症(TRS)患者を対象とする長半減期型非定型抗精神病薬(LAA)とクロザピン(CLZ)の有効性の検証. 千葉医学雑誌 113 99(4). 2023 年 8 月.
7. 大迫 鑑頭, 橋本 佐, 中里 道子, 木村 大, 細田 豊, 稲葉 洋介, 伊豫 雅臣. 神経性過食症,過食性障害に対するオンラインガイドセルフヘルプ認知行動療法(iGSH-CBT)の開発研究. 千葉医学雑誌 113 99(4). 2023 年 8 月.
8. 大迫 鑑頭. 精神看護の基盤となる理論 バイオサイコソーシャルモデル. 看護学生のための精神看護技術. サイオ出版. 2023 年 8 月.
9. 青柳 有希, 大迫 鑑頭, 石井 宏樹, 中里 道子. コロナ禍における児童思春期の摂食障害 COVID-19 感染症流行下における回避・制限性食物摂取症(ARFID)に対する Family Based Treatment. 総合病院精神医学 279 35(3). 2023 年 7 月.